

もったいないかいじゅうを やっつけろ！

京都市 環境政策局・作

ホリグチイツ・絵

いま、この瞬間も
地球を脅かしている
もったいない怪獣。

これから始まるのは、
もったいない怪獣から地球を守る、
地球防衛隊のダイジと、
小学生の京ちゃんの物語です。



演出のポイント

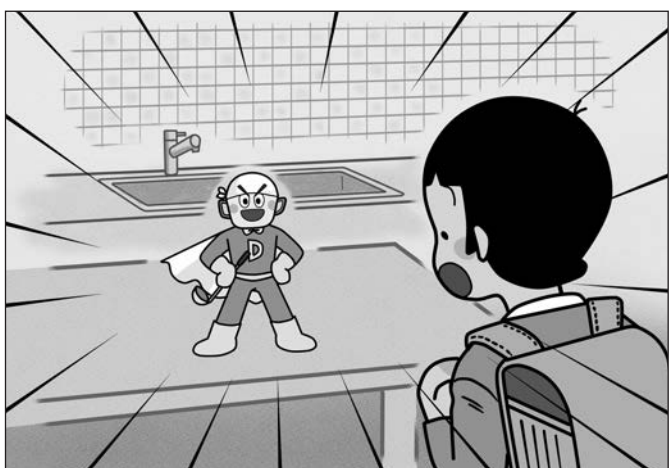
ある日、学校が終わって、京ちゃんが家に帰ると、台所にいたのは……。

京ちゃん 「わっ、なんだコレ!？」

ダイジ 「僕は地球防衛隊のシゲンダイジ。地球をもつたいない怪獣から守るのが仕事。京ちゃんの家の台所から、僕の助けを呼ぶ声が聞こえてやってきたんだ。」

京ちゃん 「もつたいない怪獣ってなあに?」

ダイジ 「ほったらかしにされてダメになってしまった食べ物たちが、あるとき、もつたいない怪獣に変身してしまっただ。仲間を探しに京ちゃんの家に来て来たんだよ。だから助けを求めているのはきつと……。」



ダイジ 「あの冷蔵庫だ！」

京ちゃん 「えっ!? 助けを呼ぶ声なんて聞こえないよ?。」

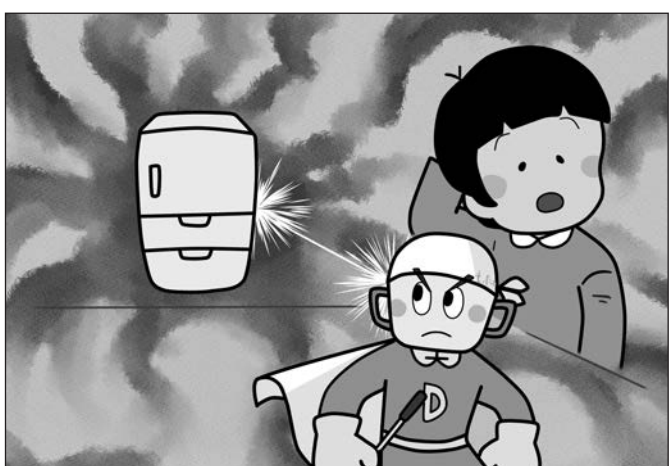
京ちゃんは冷蔵庫の扉を開いてみました。

京ちゃん 「いつもと同じで食べ物がいっぱいなんだけど。」

ダイジ 「京ちゃんには、この冷蔵庫の音が聞こえないんだね。」

——抜きながら——

ダイジ 「じゃあ、聞こえるようにしてあげる。」



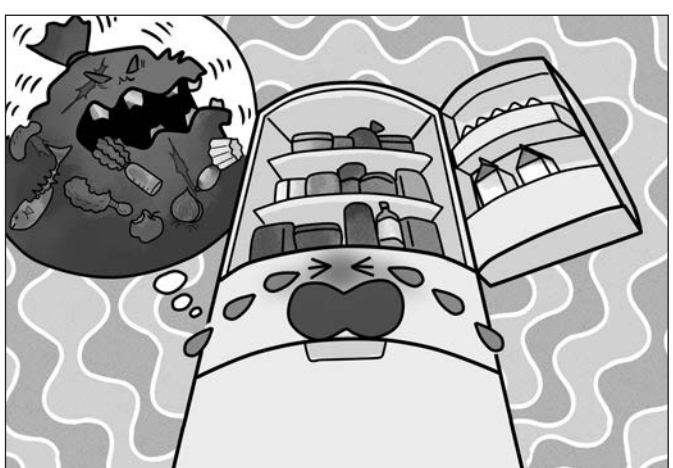
冷蔵庫 「うつつ。うえーん。誰か助けて……。」

京ちゃん 「どうしたの!? 何があったの!?」

冷蔵庫 「京ちゃん。私の友達がひとり、もつたいない怪獣にされてしまったんだ。」

冷蔵庫 「このままじゃ、ほかの食べ物たちももつたいない怪獣にされてしまって、食べられなくなってしまうよ! えーん、えーん。」

冷蔵庫は声をあげて泣いています。



京ちゃんきょうちゃんは聞きました。

京ちゃん 「ダイジさん、どうしたらいいかな？」

ダイジ 「よし、食べ物レスキュー作戦だ！ 京ちゃん、このスプーンを持って。」

ダイジの取り出したスプーンを受け取ると、京ちゃんはダイジと同じくらい小さくなりました。

ダイジ 「さあ、レッツゴー！」

ダイジと京ちゃんは冷蔵庫に飛び込みました。

演出のポイント



ダイジはヨーグルトを見つけました。

ダイジ 「京ちゃん、この日付はなんだか知っている?」

(★1)

京ちゃん 「ええと、賞味期限かな?」

ダイジ 「そう、賞味期限だ。このヨーグルトはちよつと賞味期限が切れているね。でも、賞味期限はおいしく食べられる期間のことで、日付が少し過ぎていてもすぐに捨てる必要はないんだよ。」

ダイジはヨーグルトのふたを開きました。

ダイジ 「大切なのは、本当に食べられるのかしつかり判断すること。食べられるかどうか、お父さんやお母さんに聞くのもいいね。うん、これはまだ食べられる。ほら、もったいない怪獣がダメージを受けて、ヒットポイントが下がっているよ。」(★2)

京ちゃん 「本当だ! ダイジさん、食べ物をごみにしない方法が分かればもったいない怪獣にダメージを与えることができるんだね。」

演出のポイント

★1 ここで間を置いて、読み手は子どもに「ヨーグルトの日付がなんだかわかる人?」と聞く。子ども、口々に答える。

★2 読み手は、右上のヒットポイントのゲージを指し示す。



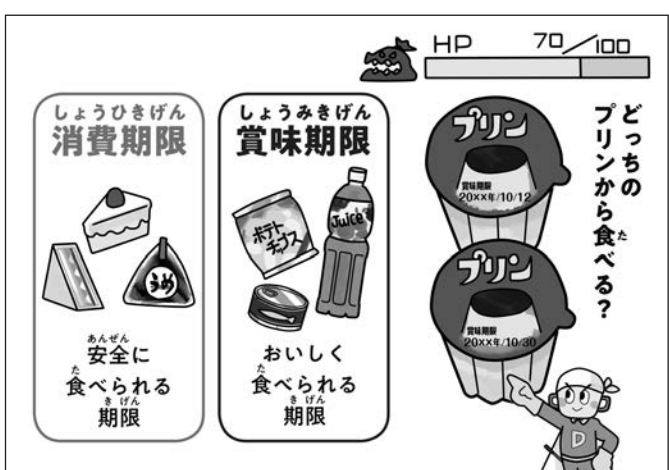
ダイジ 「京ちゃん、ここに2つプリンがあるね。京ちゃんはどっちから食べる？」

京ちゃん 「あんまり考えたことがなかった。いつも手前にあるものから食べていたよ。」

ダイジ 「古いほうから先に食べるのが正解！ 賞味期限が書かれた食べ物がいくつもある場合は、日付の古いものから食べて、食べ物がもつたない怪獣に変身してしまわないようにしよう。」

京ちゃん 「あつ、ダイジさん！ またもつたない怪獣が弱ってる！」

ダイジ 「賞味期限とは別に、消費期限っていうのもあるんだよ。消費期限は安全に食べられる期間のことで、過ぎていたら食べないほうがいい。どっちの日付が書かれているか、よく確認してね。」



京ちゃん 「あつ、ダイジさん大変！ 冷蔵庫の奥に、こんなにたくさんウインナーがあつた！ ……お母さん、冷蔵庫の中に何かあるかを忘れて、買い過ぎちゃったんだね。」

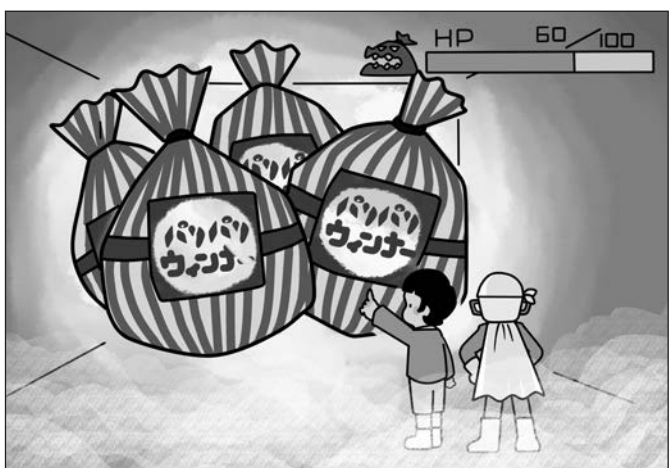
ダイジ 「そうだね。買い物の中には、使い切れる分だけを買うことが大切なんだ。」

京ちゃん 「そうかあ。これからは、買い物に行く前に、冷蔵庫の中をよく見て何が必要か考えないとだめだね。」

ダイジ 「よし！ またもつたいない怪獣が弱ってきた。」(★)

演出のポイント

★ 読み手は、右上のヒットポイントのゲージを指し示す。



ダイジ 「京ちゃん、ほらリンゴ！ おやつにどうぞ。」

ダイジは、リンゴを洗い、切りました。

ダイジ 「皮も栄養があつて、食べられるんだよ。」

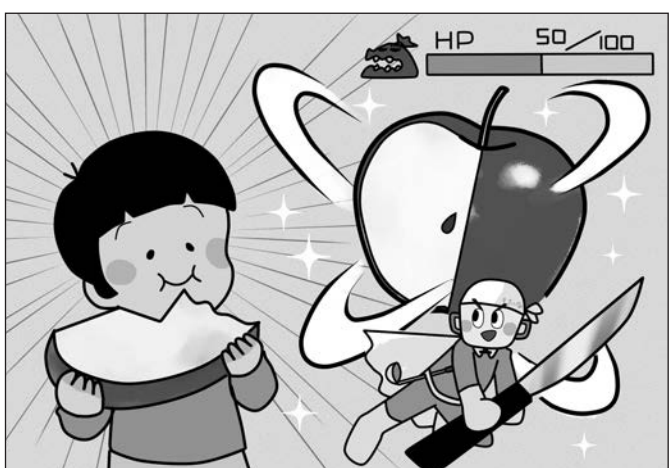
(★)

京ちゃん 「うん、それにごみが減らせるね。」

ダイジ 「京ちゃん、分かってきたね。食べ物を無駄にしないで、大切に食べ切ることで、食べ物はもつたない怪獣に変身しなくて済むんだ。」

演出のポイント

★ 読み手は子どもに「リンゴ、皮付きのまま食べたことある人？」と聞く。子ども、口々に答える。



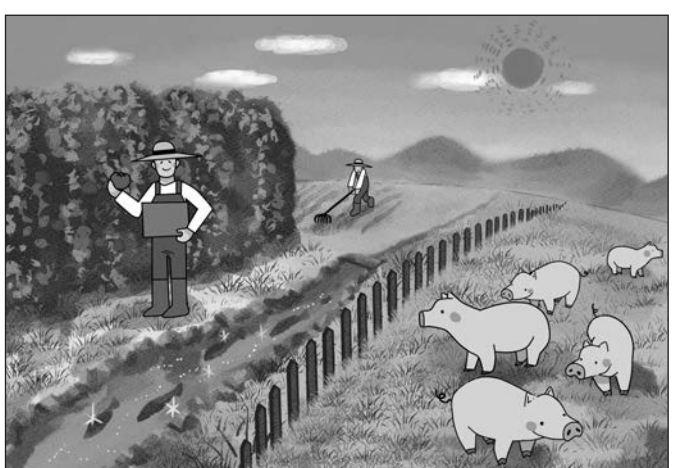
ダイジ 「ごみだけの問題じゃない。食べ物がいまここにあるのは、いろんな力のおかげなんだよ。」

京ちゃん 「いろんな力って？」（★）

ダイジ 「太陽や水、自然の力があって食べ物は育つ。それに、食べ物を育てる人、運ぶ人、売る人。買ってきてくれたお父さんやお母さんがいて、いま、僕たちの目の前にあるんだよ。」

京ちゃん 「そうか、みんなのおかげなんだね。」

ダイジ 「そうだよ。だから食べる時には感謝の気持ちを入れて大きな声で『いただきます』と言うんだよ。」



演出のポイント

★ 読み手は「いろんな力ってなんだろう？ 分かるかな？」と子どもたちに問いかける。子どもたち口々に答える。

ダイジ 「さあ、もったいない怪獣のヒットポイントも下がって、(★)あと一息だ。いよいよ勝負を決めよう。もったいない怪獣への必殺技を京ちゃんに教えるよ！」

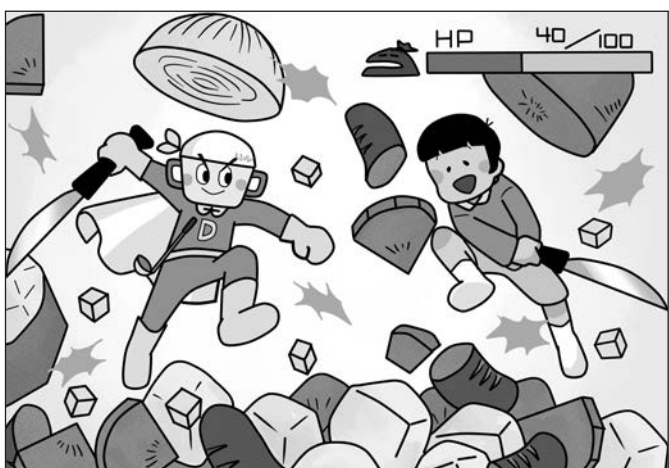
ダイジは少しだけ色が変わったタマネギや、ニンジンといった野菜、さっきのウインナーを冷蔵庫から取り出しました。

ダイジ 「あれもこれももったいない。京ちゃん、一緒に切ろう！」

ダイジと京ちゃんは空中で全てを切っていくきます。

演出のポイント

★ 読み手は、右上のヒットポイントのゲージを指し示す。



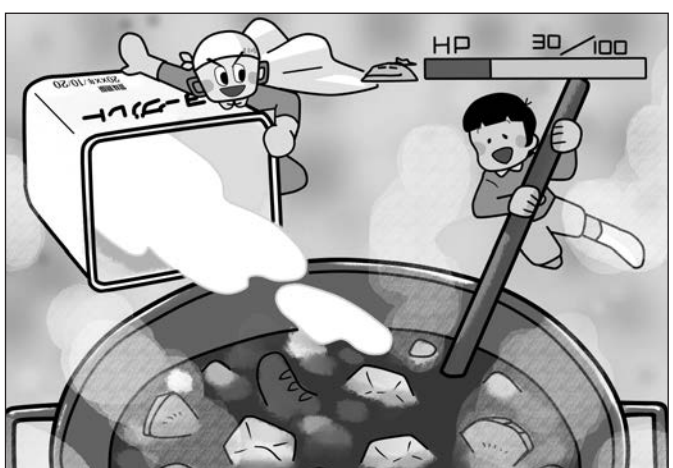
ダイジ 「京ちゃん、もう一息だ！ 最後は僕に任せろ！」

そう叫んだダイジは、さつき刻んだ材料を次々と鍋に入れていきます。

ダイジ 「さあ、柔らかくなるまで煮よう。さつき見つけたヨーグルトも入れよう。(★)

——抜きながら——

カレーのルーも投入だ。」



演出のポイント

★ 読み手は子どもに「ダイジがなにをつくっているかわかる人？」と聞く。子ども、口々に答える。

ダイジ 「しっかり火が通ったぞ！ 冷蔵庫の余り物もすつきりした。これが、もったいない怪獣への必殺技！ オール・イン・カレー・タイフーンだ！」

ダイジの必殺技が決まって、もったいない怪獣は消えてしまいました。

そこへ……
カチャカチャ。

お母さん 「ただいまー！」

——抜きながら——

ダイジ 「おっと、お母さんが帰ってきたね。僕はこれで失礼するよ。京ちゃん、あとは任せたよ。」

そしてダイジの姿が見えなくなりました。京ちゃんは元の大きさに戻りました。



お母さん 「あら！ いい匂い！ 京ちゃん、カレーを作ったの？」

京ちゃんは答えます。

京ちゃん 「うん。（小さな声で）ダイジさんとね。」

お母さん 「あら、冷蔵庫が空っぽ！ 上手に使い切ったのね。」

京ちゃん 「お母さん、食べ物を粗末にしないよう、これからは必要な分だけを買うようにしようね。……もったいない怪兽を増やしたくないから。」

お母さん 「京ちゃんの言うとおりね。これからは気をつけて、もったいないことはしないわ。」



長い歴史を持つ京都には、自然と共に生きて育ててきた知恵や「しまつのこころ」があります。

「しまつのこころ」は、命や資源、作り手の皆さんに「ありがとう」の気持ちを持つこと。これは食べ物を大切にすると行った行動にもつながっていきます。

大切な食べ物をもったいない怪獣に変身させないために。これからも京ちゃんは「しまつのこころ」を大切にして暮らしていきます。

〈終〉

発行：2018年10月

